

[FIC オープンセミナー報告] 「国際協力の光と陰」そして「法政グローバルデイ」へ

松本, 悟

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

166

(終了ページ / End Page)

174

(発行年 / Year)

2015-04

[FIC オープンセミナー報告]

「国際協力の光と陰」そして 「法政グローバルデイ」へ

松本 悟

2014年1月20日、ボアソナードタワー3階0300教室がほぼいっぱいになった。FIC オープンセミナー「NGO から見た国際協力の光と陰—私たちに何ができるか—」に集まった人たちでほとんどが大学生など若者である。国際協力に関心を持つ法政大学国際文化学部や法学部の学生を中心に実行委員会を作り、学生主体に準備と運営を行った。その結果、運営側と参加者を合わせると60人以上の学生が月曜日の夜の教室を埋めた。このFIC オープンセミナーを作り上げた学生たちは、その4ヵ月後、300人以上の参加者を集めた「法政グローバルデイ」を開催する原動力となった。そこで、この2つのイベントを中心に主導した国際文化学部4年の池田佳穂さんに報告してもらった。

「国際協力の光と陰」の企画立案まで～1年から抱いていた問題意識を具現化～

私は1年生の頃から国際協力に関心がありました。

1年生の頃は「国際協力＝国際連合(国連)」というイメージを持っていて、模擬国連サークルに所属し、また法学部国際政治学科の授業

を聴講して学びました。加えて国連・国際政治関連のセミナーにも足を運びました。この時、私は国際協力の分野における国連の役割にとっても期待をしていました。しかし、学びの中で国連の限界を知り、国際社会は国際問題を結局解決することができないのでは、と失望していました。

そんなとき、私は履修していた授業で衝撃を受けました。国際文化学部の「実践国際協力」という授業です。その授業では、様々な領域の国際問題を国連だけではなく市民・民間セクターなど含んだ目線で考察し、ディスカッションしていきました。今まで国際問題を国連などのマクロの視点でしか考えていなかった私は、NGOなどのミクロの視点を得ることができました。そして、ひとつの事象でも視点が違うだけで状況が大きく異なることを知り、多角面で物事をとらえる重要性を学びました。2年生の前期は、実践国際協力の担当教員であった藤岡講師にお願いして大学院の授業に参加し、知識を深めていきました。

SAはイギリスのリーズ大学でした。そこでは知識だけではなく現場を知ろうと思い、開発教育を目的とした現地NGOの活動に参加しました。そして帰国後は、現地NGOの紹介で、Oxfam JapanというNGOで活動を始めました。

3年生はNGOで同じく活動する学生と共にキャンペーンやイベントを企画していました。その活動を通して、経済学や政治学、環境学、文化人類学など多様な学問を専攻する学生と関わることができました。そのとき、私はある問題意識を持ちました。それは、同じ国際関係を学んでいても、専攻する学問や所属するサークルやコミュニティにより、学問領域が分断されがちであり、横断的に意見交換をする場がないことです。私は、多角面的かつ構造的に国際問題が考えられ、意見を交換できるイベントを法政大学で企画したいと思いました。

「国際協力の光と陰」2014年1月20日開催～学生から JICA 職員まで参加～

私は法政大学の国際文化学部、国際政治学科、人間環境学部を対象に、イベントを考案しました。内容は二部構成です。第一部は「開発援助」にフォーカスをあて、国際政治学で言及されることの多いメリット（光）と文化人類学で言及されることの多いデメリット（陰）の双方から考えられるようにそれぞれ講演者を呼び、講演会を開催しました。第二部は開発援助の現状を一つ取り上げ、これをどのような方法で解決していくのか、異分野の参加者同士で協力しながら創作していくグループディスカッションを企画しました。以下、詳細です。

□第一部 講演会「国際協力の光と陰」

- ・「開発援助の陰～プロサバンナ事業の実例から～」森下麻衣子さん（オックスファム・ジャパン）
- ・「開発援助の光～NGOの開発～」山田太雲さん（オックスファム・ジャパン）
- ・「コメント～JICAや政府の観点から～」松本 悟さん（法政大学国際文化学部）

□第二部：グループディスカッション

「開発とは？～モデルソリューションを考えよう～」

- ・ケーススタディでディスカッション（資料あり）
- ・各グループフロア発表
- ・3人のプレゼンテーターによる講評

企画に協力してくれたのは、国際文化学部と国際政治学科の学生9人でした。メンバー間でも学んでいること、活動していることが異なるため、話し合いはいつも刺激的でした。企画のサポートだけではなく、彼らのアイディアにより、講演会の知識を補う前座講演も実現す

ることができました。

当日は40人ほど参加していただきました。当初対象としていた3学部だけではなく、法政大学の他学部や他大学の学生、大学院生、社会人、JICA職員、専門家などが来ていただき多様な意見交換が実現できました。前座講演から主講演、そして懇親会の計5時間ほど、終始活気に溢れていました。



前座企画では主講演の補足知識のほか、ワークショップも開催しました



主講演の様子です。



グループディスカッションのフロア発表

「法政グローバルデイ」2014年5月17日開催～参加者が300人を超えた～

法政グローバルデイは、法政大学が国連アカデミックインパクトに加盟したことに際して行う学生企画でした。1月のイベント成功により、私を含め前回の企画メンバーが中心になって検討を始めました。

運営メンバーの多様性が本企画のカギでした。前回のイベントから引き続き手伝ってもらった人たちに加え、大学ホームページの公募により最終的に20人を超えました。国際文化学部、国際政治学科、文学部、社会学部、社会福祉学部の1～4年生の学生に加えて、留学生もいました。前回のイベントとは異なり、企画コンセプトを運営メンバー全体で考えました。時間はかかりましたが、より多様な意見を盛り込むことができました。

イベント全体は三部構成でした。以下、詳細です。

□第一部 パネルディスカッション

テーマ「世界の一線で活躍してきた方々が学生時代にやってきたこと」

パネリストの先生方

- ・法学部 弓削 昭子 教授
- ・人間環境学部 武貞 稔彦 教授
- ・国際文化学部 松本 悟 准教授

(議事進行 国際文化学部4年池田佳穂)

□第二部 国際インターンシップ・ボランティアプログラムの紹介

夏期 海外・国内ボランティアプログラム

夏期 海外インターンシッププログラム

春期 インターンシッププログラムの事前紹介

□第三部 学生企画「法政ミニグローバルフェスティバル」

学生企画のコンセプトは「ほんやりをくつきりすること」でした。具体的には、漠然と国際関係に関心がある参加者が、実際にどの分野に関心があるのかを知り、その分野との関わり方を知り、実際に行動に移してもらうことです。そのコンセプトを実現するため、学生企画内容も時系列は以下の3ステップ、場所は国際協力エリアと国際交流エリアに分けました。

- ・セッション1「世界について知る」では、NGO、学生団体と留学生によるワークショップやセミナーを各ブースで開催して、参加者に国際協力や国際交流の体験を提供しました。
- ・セッション2「世界との関わり方を知る」では、関連団体による活動報告と関わり方の紹介を各ブースで展開して、参加者に国際協力や国際交流の手段を提案しました。
- ・セッション3「世界に踏み出す」では、参加者と参加団体、第一部ご参加いただいた教授の方々、運営メンバーを対象に交流会を開催して、参加者が関心を持った人と繋がれる場を作りました。

《参加団体》

NGO：Oxfam、GLMI、NICE、ACE

学生団体・サークル：模擬国連サークル、Study For Two、IVUSA、Hi-C Orange、U.I.A、国際学生会議

その他：内閣府青少年国際交流推進事業

結果、第一部のパネルディスカッションから第三部の学生企画まで300人以上の方が参加してくださいました。参加者の中には、実際に興味関心をもった団体にコンタクトをとっている方も多くいました。



第一部パネルディスカッションの様子



第二部国際インターンシップ・ボランティアプログラムの紹介。既参加者からの体験談紹介もありました。



第三部の国際交流エリア



第三部の国際協力エリア



交流会の様子



交流会後の集合写真、フォトアクションも兼ねています。



運営スタッフの集合写真。このほか当日スタッフにも協力してもらいました。

最後に～大学にはチャンスがたくさんある！もったいない！！～

私は、大学3年生まで大学外で活動してきました。開催した主な企画は他大学や外部団体で行っていました。しかし、松本悟准教授と出会い、自分がずっと開催したいと考えていた企画を大学内で実現することができました。多くの大学で企画経験をしてきましたが、法政大学は学生のイニシアティブがあれば企画を開催しやすい環境だと思います。なぜなら多様な分野の学生、グローバル人材育成事務の方、経験豊富な教授陣がいて、自分の意見や考えに協力してくれるきっかけがたくさんあるからです。在學生に伝えたいことは、「大学内では何もできない。大学外へ行かなくては」と思わず、自分のやりたいことが大学内でできるか、まず考えてほしいということです。

(報告：池田佳穂)